

学体連会報

発行日 平成元年 10 月 20 日
 東京都渋谷区代々木神園町 3 番 1 号
 国立オリンピック記念青少年総合センター内
 財団法人 日本学校体育研究連合会
 発行者 会長 大石 三四郎

学校体育研究の方法

会 長
 特殊法人 日本体育・学校健康センター理事
 学校法人 埼玉短期大学 学長

大 石 三四郎



学校体育の研究をここで体育授業の研究と限定すれば、これほど難しい研究はない。しかも授業は 1 回生起の事象であって何回も繰り返すことは実際には出来ない。そこで事前にあらかじめ授業中に生起することを予想して教案なるものをたて授業を実施するのである。しかし、あらかじめ生起することを予想して、と言うが、これを観念的に予想するわけではなく、本来なら対象者について授業直前の能力調査に加えて、その他、関連の実態調査を詳細にしなければならぬのである。さて、理想はそうであっても実際には多くの授業時数をもつ教師にとっては不可能に近いことである。そこで、経験とか他の関係資料を参考にして教案を立案することが一般である。そして教育が「文化の伝達」をその目的の一つにしている以上授業内容に含まれている文化財はできるだけ正確に余すことなく伝えなければならぬ。言葉を換えていえば、例えば教材をスポーツにとればそのスポーツ種目の歴史はもとよりスポーツの実技に関連しての多くの今日まで研究された文化財を児童・生徒にどのような方法で伝達するかということである。しかも膨大な文化財を被教育者の其の時の能力と理解力に合わせたかたちにしなければならぬ。また文化財としてのスポーツ実技の理論は理論であるがこれを児童・生徒の心身の受容能力に合わせるだけでなく、その内容を教育を受ける児童・生徒の発育の状態にあわせなければならない。しかも、その児童・生徒の受容適期を選ばなければならぬし、これは多くの者を相手とする授業では一言に言って大変なことと思う。しかし困難だから

といて放任するわけにはいかない。だが現実には教師が殆ど何もしなくても、不思議といってもよいほどに、極く自然にボールを子供の真ん中に投げれば子供はサッカーでもなんでも今までの見よう見まねで覚えたことをやり始めるのである。考えて見れば学校体育研究は教師が理論的に組み立てたものの創作活動の中と言うより、極論すればむしろ、この様な若い人の自然の活動の中から学校体育研究の理論が生まれる究極の契機があるのではないか、といてよいように思われる。それに体育授業にはこの他、文化財の伝達ということだけでなく児童・生徒そのものの心身の健全なる発育・発達を正常な状態で進めるといふ体育本来の目的がある。例えば、バレーボールを実施している時に、どこの場面での様にして生徒の体力(生理学)を付けるのかと考えたり、気力(心理学)をどのようにして付けるのか、どの機会を利用するのか、または楽しさ(社会学)をどうやって感じさせ、交遊のクサビとして定着させるのかともなる。しかも、この頃日本人の寿命が延びたからといって生涯スポーツということを教師は自分の頭の中におきながら(福祉)児童・生徒が老人になつた時に役立つことを考慮に入れて親切に教育するのである。

このように考えてくると体育授業は誠に荘大なる人間に対する長期的視野にたった総合教育プロジェクト研究の一つの分野であるともいえる。言葉をかえれば巨大なる時間・空間の拡がり(ヒロガリ)をもつた学際的総合教育のプロジェクト研究の一つなのである。

体育経営のポイント —学校の教育目標の具現化—

東京都江東区立明治小学校校長 三 浦 一 郎



学校での体育指導が行われるとき、各小学校では独自の体育目標を設定し、それに基づいた体育経営の目標を立て、その実現を期待している。そこに教育活動としての体育を、どのように経営したらよいか

が課題となる。一般に体育経営とは、体育の経営体はその目標を定め、それを達成するために行うすべての継続的な活動である。学校の体育経営とは、教師の組織体と

しての体育の経営体が対象としての児童・生徒に、さまざまな体育事業を提供し、体育の目標を達成することができるように条件設定をすることである。

そこで、体育経営を効果的に進めていくためにはどのような角度から問題をとらえていったらよいかについて考えなければならない。

ここでは、学校の教育目標の具現化の視点から、取り上げてみたい。

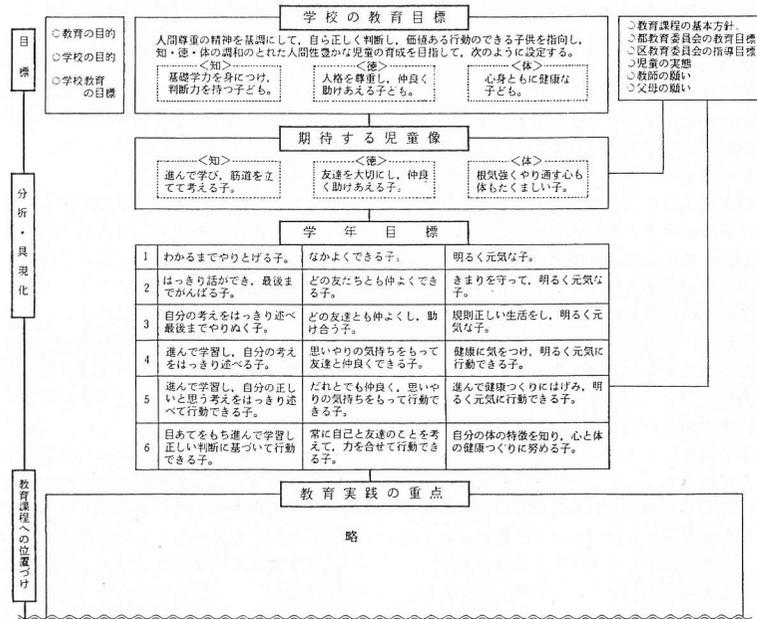
1. 学校の教育目標の具現化

どこの学校の教育目標をみても、健康の増進と体力の向上を目指した内容項目が掲げられている。

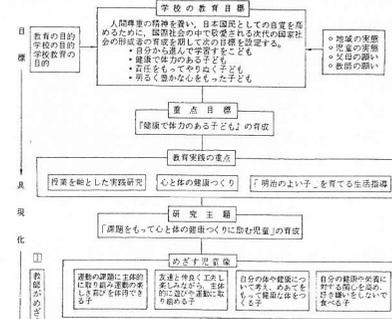
次のものは、本校の例であるが、教育目標—重点目標のように、総括目標の下位に、地域の実態や

父母の願いを受けとめ、学校の実態と将来構想に即して、具体目標、実践目標又はめざす児童像を画く必要がある。それはできるだけ各学年別に具体的な姿を示すことが望ましい。

① <教育目標の具現化—教育目標から学年目標へ—>



② <教育目標の具現化—心と体の健康づくり>

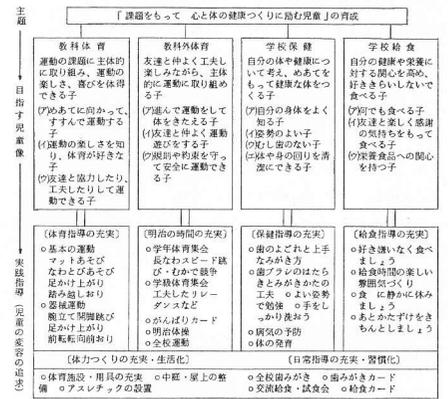


2. 実践への取り組み

上記の②のような、「健康で体力のある子ども」の育成を図るには、学習指導要領の総則第1の3「学校における体育に関する指導」との関連を十分に考慮して、実践構想をたて、計画的に継続的に指導する必要がある。小学校においては、その中核と

して、一人一人の児童をみつめ育てる学年・学級経営を重視していくことが大切である。

<体育に関する指導の実践化> (例)



重度・重複化に伴う養護学校の体育指導に思うこと

千葉県立野田養護学校校長 渡 邊 悦 男



1. 重度・重複化してきた児童生徒の現況
本校は、千葉県最北端の利根川と江戸川の分岐点にほど近い野田市に、「ふるさと千葉5か年計画」に基づいて、平成元年4月1日に開校された新設の精神薄弱・肢体不自由養護学校である。児童生徒は、県立柏養護学校から主に精神遅滞児

30名、県立松戸養護学校から20名、地域の特殊学級等から17名、計67名が転入し、表1に示した学級に在籍している。全体の約42%が重複学級対象で、普通学級といえども単一疾患の者がほとんどいない状況である。表2でもわかるように障害が重複し、また多様化してきている。

表1. 学級編成

小学部				中学部				高等部			
項目	生徒数	職員数	担任数	項目	生徒数	職員数	担任数	項目	生徒数	職員数	担任数
1-1	3	1	4	1-1	3	2	5	1-1	3	2	5
2-1	3	0	3	2-1	1	3	4	1-2	2	2	4
3・4-1	2	1	3	重複1	1	4	5	2・3-1	2	2	4
5・6-1	2	1	3	(訪問)	1	1	1	重複1	4	1	5
6-1	1	3	4					重複2	0	2	2
重複1	2	1	3	計	5	10	15	計	11	9	20
重複2	2	3	5								
重複3	1	4	5								
訪問	1	2	0								
計	18	14	32								

表2. 障害別児童・生徒数

障害名	小	中	高	計	障害名	小	中	高	計
精神発達遅滞	31	15	20	66	レノックス症候群	1			1
脳性まひ	7	4	7	18	筋ジストロフィー	1			1
てんかん	2	1	7	10	体幹機能障害	1			1
自閉的傾向	2	5	7	14	脳梁欠損症	1			1
ダウン症候群	1	2	3	6	脳挫傷	1			1
水頭症	1	1	2	4	脳脊髄質症	1			1
二分背椎	1	1	2	4	脳炎後遺症	1			1
難聴	2			2	ソトス症	1			1
多発奇形	1	1	2	4	染色体異常	1			1
小頭症	1	1	2	4	心疾患	1			1
頭部外傷後遺症	1		1	2	多指症	1			1
先天性白内障	1		1	2	盲	1	1	2	4

*複数の障害を持つ場合は、その全てを数える

2. 体育指導に際しての基本的な考え方として

児童生徒が重度・重複化、あるいは多様化してきているといっても、その実態はさまざまであるから、現実の指導に当たっては、それを画一的に考えることができない。まず個々の心身の状況を出発点として、これに対応した指導を行うことが必要なのである。このことは、ことさらに新しい考え方とは言えないのに、学校というところは、言っていることと実際にやっていることに大きな差が認められる。

たとえば、体力づくりが重要だとすると、体力づくりにばかり目を奪われてしまって、個々の子どもに応じた指導プログラムを立てての実践ではなく、画一的にやれマラソンだ、それサーキットトレーニングだとかもそれをやるのが体力づくりそのものと受けとめやすいのである。

特殊教育の目標は、その子が成人に達するまでに、その能力に応じた自立を遂げ、望ましい人間関係の中で、自分自身を表現できる能力を身につかせ、できるだけ少ない介助で、できるだけ人生を楽しく送ることができるようにすることにあると言われている。そうだとすれば、単に一部の能力だけに目を向けるのではなく、個々に応じて、長期的な予測の中で、具体的な指導目標を立て、それとの関連で現在の指導課題を考えていく必要があり、その子なりのバランスのとれた発達を促す具体的な目的行動を示した指導でなければならないのである。

3. 「有病息災」論的な体育指導の留意点

「有病息災」ということばがある。何らかの持病

があったり、病弱、虚弱である人の方が、自分の体調や健康に気を配った生活ができ、その結果として健常者以上に長寿を全うできることもあるというのである。しかしそのためには、体力や体質は個々人それぞれ違うので、それに応じた配慮や工夫が必要であることは言うまでもない。

重度・重複化した児童生徒の体育指導を進める際にこの「有病息災」論の考え方がとても必要なことに思えるのである。

つまり、無理してでも伸ばそうとするのではなく、今その子は、何ができて何ができないのか、できないのは、どこをつまづきによるのか、また、できないというのは、やり方がわかっていないからではないかを確かめていかなければならない。

指導困難だと思っている教師の中に「これだけ一所懸命に教えても、子どもがなかなかできないのは、障害が重いから仕方ないことだ」と、すべて障害のせいになっている者が多い。障害が重いということは、一体どのようなことを指しているのだろうか。教え方がわからないから重いと言って逃げているのではなからうか。教え方がわかれば、子どもから学べばいいのであって、何も障害の種類や程度にこだわるのではなく、今その子のできることからスタートすればよいのである。今その子の示すありのままの動作や運動そのものに視点をあわせ、どのような弁別刺激に対して、どんな反応行動がとれるかを指導の手がかりにすればよいのである。要は生活の中での具体的な事実に基づいた子どもを理解することが一番肝要なことといえるのである。

小規模の小学校における体育経営

東京都港区立水川小学校校長 村田 久子



小規模校の体育で楽しさに欠けるのは、ボール運動などのゲームに迫力がないこと、器械運動では練習回数が多くて疲れてしまうこと、そして、運動会では、校庭の広さが目立って演技者が小さく見えてしまうことなどである。

しかし、小規模校ならではの演出があるし、何よりも一人一人の技能が確実に伸びるという利点がある。「体育が嫌い」とばかりにいつも陰にかくれ、ボールのこないところに立っただけというのは許されない。男女のバランスが悪くても、少人数の

利点を生かした体育学習にしたいものである。

1. ミニミニサッカー

2人でボールをパスしながらシュートする。フォワード2人、ゴールキーパー1人の3人で1チームである。コートのはしらはバスケットボール程度。試合時間は2分。合図でぱっと選手が交替して、そのままの状態ですべて試合を続ける。5回続けてひとつの試合が終わり、合計点で競い合う。

2分出たら、2分が4分は休めるようにチームを組む。従ってどうしても人数が少ない場合、ゴ

ールキーパーなしとし、ゴールラインに次の選手が並んでボールを受け、コート中央に投げ返す方法をとる。2分の合図ですばやく交替することが大切なポイントである。自分の番が終わっても気をゆるめず試合を見つめ、すぐ出られるような待機の姿勢をとる。その合間に得点板の記入もありませんかいかいそがしい。計時と審判は教師がする。

パス・ドリブルの練習を試合形式にしたのだが、スピード感があり、コートが狭いことからすぐ得点につながり、活気があって面白い。男女をペアにして、3回はパスすることをルールにすると、苦手な女子の技能も伸びてくる。

大きなパスが出来ないのが欠点だが、それは臨接学年との合同体育で行う。ポートボール、バスケットボールでも利用できる。また人数が多すぎて校庭が狭い場合、2つのコートで同時に行うことも考えられる。

2. 兄弟学級

小規模校でよく行われているのは臨接学年の合同体育である。5・6年、3・4年、4・5年など合同での体育学習を多くしたい。その場合、全く学年をはずして、身長順、能力別、助け合い組など小グループ編成に変化を持たせるのがよい。1～3年の低学年、4～6年の高学年による合同体育も考えられる。

本校には1・4年、2・5年、3・6年の兄弟学級がある。1年に入学すると4年がその兄弟となり、3年間続くのである。

この兄弟学級を体育に利用してみる。例えば、3・6年のマット運動。初めに全員で鬼遊び。い

っしょにマット運動のための準備運動。次に、3年、6年それぞれのねらいに応じたマット運動。次は、3年と6年が組んだグループによって、個人の課題追求。このとき、6年生は3年生を援助する。手のつき、スピードなど助言する。6年生も自分の課題によって観点を3年生に伝えて見てもらう。どうしても3年生に重点をおかれた練習になり易いが、6年生も改めて基本的なことに目を向けることができ、普段リーダーにならない子どもリーダーとして助言することによって自覚が高まるので、自分自身の練習も熱心になる。最後はまた、それぞれの学年に戻って仕上げの練習をする。

3. 家族ぐるみの運動会

運動会は体育学習の発表の場である。授業の中で鍛えられ磨かれた体と技を、ある程度の演出の中で効果的に発表し、保護者にみてもらおうと同時に、互いに認め合う機会としたい。

しかし、小規模校では年に1度の楽しいお祭りとしての気分も捨て難い。学習の発表という基本線を大事にしながら、演技種目は2学年合同で活気が出るようにし、全校競技も多くする。全校が紅白に分かれての綱引き。選手ではなく全員参加の全校リレー。簡単なゲームの全校団体競技。さらに、父母参加種目を加える。全校おどりだけでなく、親子玉入れや着せ替えリレーなど。低学年の折り返しリレーは親子でというのも楽しい。小規模校でこのような体育学習を組むには、年間指導計画が明確であることが大切である。便宜主義にならぬよう、学年目標をしっかり押さえたい。

大規模の高等学校における体育経営

東京都立保谷高等学校教頭 広瀬 照夫



はじめに(大規模高校の誕生)

高校進学率の上昇に伴って、各自治体では激増する中学校卒業生の高校への進学を希望している就学対策に頭を悩ませた。

そこで東京都では、学級当りの定員の増加や臨時的措置としての学級数の増加と同時に、新設高校の設置に着手した。新設校にはこのような事情から大量収容の可能な学校として、1学年10学級規模の高校を構想した。他府県のように既設校での増学級

は、各種の条件から実施できず新設校で30学級規模校が設置されることになった。

大規模校の特性

東京都における大規模高校は、前述のように新設校であり、概して交通の便には恵まれず、比較的若年の教師集団で、多様な生徒の学習指導を担当しているのが現状である。

若さと情熱をもって、新しい伝統を創り上げようとする教師と、学習主体である生徒の意欲とが、し

ばしばかみ合わない場面が見られるのは、大規模高校の悩みといえよう。

体育経営の問題点

(1) 教科指導 新設高校であり、その上大規模であるため、多様な生徒集団と様々な経験をもった教師集団による教育活動は困難な点が多い。8〜9名の専任教諭と若干名の非常勤講師(時間講師)を雇用して、教科指導の時間割を組むことは、他教科の協力を得なければならぬ。これからの高校体育では、多様な選択制こそ望まれるところであるが、更に時間割の編成など困難さが増すであろう。

(2) 特別活動 「数は力なり」ということばの通り、大規模高校における多数の生徒の多様な特技の指導も力強い限りである。しかし、活動場所や施設面に関しては十分とは言えず、一般校に比べてクラブ・部の数も多いので、活動に制約を受ける。

本校の体育経営の状況

現在、都立高校は全部で211校を数えるが、このうち17校を大規模高校と呼んでいる。本校はこの17校中・昭和47年度第2番目に他の3校と同時に誕生し、30学級規模の学校として今日に至っている。

(1) 本校独自の「体育ノート」を活用 開校後の3年目から、「大規模高校における体育ノートを活用した効果的な指導について」の研究が体育科を中心に継続して行われている。

昭和54年には、この実績が認められ、文部省後援による日本学校体育研究連合会の表彰を受けた。この研究の中味は、体育実技に関する実践的な教科書づくりである。これによる期待は ① 生徒が学習内容を正しく認識し、自学自習の態度を育成できる。

② 評価内容が明確になることにより評価への不安感が除去され、正しい評価ができる。③ 体育ノートを通じて生徒の実態把握ができる。④ 教師にとつて優れた指導法の研修となると共に改善にもつながる、などが挙げられる。

以上の長期にわたる研究が維持されているのは、本校体育科教諭8名の日々、「充実した教育実践」と「相互の信頼と協力体制」にあることはいまでもない。

(2) 体育科を中心に公開講座や施設開放を実施 本校では、すでに地域住民を対象にした公開講座<初心者のための硬式テニスとやさしい運動生理学開設を開設して6年目になる。また一昨年から、体育施設の市民への開放をすすめている。

これらの開設・開放に当たっては、管理職による適時の指導性と教職員の協力体制の一致が不可欠であった。同時に指導者にとって多様な社会経験ともなり、体育科のみならず学校全体の活性化の原動力となっている。

おわりに

いずれの学校においても豊かな創造性をもった指導者を得ることが最も重要であり、これが学校経営の原点である。どのように立派な施設・用具を備えていようと、それを有効に使用することなくして教育指導の成果をあげることはできない。

そして、体育経営の中心的課題は、綿密な指導計画とそれを実現していく指導組織の活性化をどう図るかに尽きるように思う。大規模高校が抱える困難な課題に直面しながらも、その特性を十分に生かすことのできる意欲に満ちた指導者こそ、大規模高校における体育経営の基本条件であると考えている。

少人数分校における効果的な体育指導の試み

山形県米沢市立第三中学校教諭 荻原 芳彦



1. はじめに

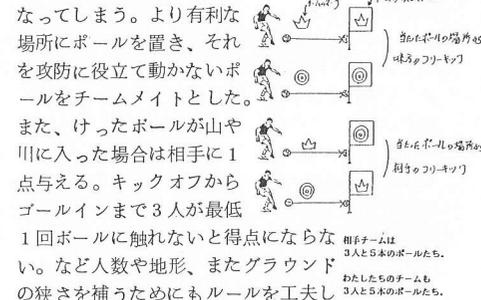
市街地から23Km離れた山の中の細木分校は、3年前新採教員として赴任した学校である。全戸数15戸、児童生徒のいる家は5戸、生徒数は小学校2名、中学校5名の合計7名と極少数で、体育授業は異学年男女合同の授業形態をとっている。体育的施設設備の状況は、グラウンドはトラック1周がやっと80m、しかも南北が山と川にはさまれている広場であ

る。体育館はバトミントンコート1面がやっととれる広さである。

2. 集团的スポーツの指導の試み

(1) ボールを仲間にしたサッカーのゲーム サッカーの授業でゲームをするには、教師が入り1チーム3人の2チームの編成しかできない。しかしこれでは人数が少ないため、サッカーの特性によ

れたゲームを味わわせることができないので、次のように工夫をして授業をすすめた。味方に仕立てたボールを5本ずつ置き、味方側のパスが味方のボールに当たるとパスがつながったと判断し、フリーキックができる。しかし相手側のボールに当たると相手マークのフリーキックに



なってしまう。より有利な場所にボールを置き、それを攻防に役立て動かないボールをチームメイトとした。また、けたたボールが山や川に入った場合は相手に1点与える。キックオフからゴールインまで3人が最低

1回ボールに触れないと得点にならない。など人数や地形、またグラウンドの狭さを補うためにもルールを工夫して、少しでも学習意欲が盛り上がるようにした。

(2) 音楽伴奏をとり入れたバスケットボールのゲーム

おもに冬期間おこなったバスケットボールのゲームは僻地集会所を体育館として使用しているため、室内が狭いのでどうしても動きが小さくなってしまふ。そこでより大きく、しかも機敏な動きができるようにするため、アップテンポの曲を流しながらプレーをしてみた。その反応は右の詩を見てもわかるようにテンポ

の早い曲がまわりの声援にきこえ予想以上に早く現われてきたように思える。これは日頃テレビやラジオで曲をききなれ、休み時間にブレイクダンスのまねなどをしたり、常に曲に対して違和感がないのであろう。めりはりのきいた曲は敏捷性を養う一つの手段にもなってくると思えた。

3. 地域に根ざした体育的行事

冬山登山

厳しい冬もようやく和らぐ3月、秋から用意してあいた1人20kgほどの砂を背負い、胸までぬかり、向いの山に登る。地区から最も見はらしのよい場所に分校からのトランシーバーの指示で砂をまき「つな木」と大きく書く。時期はずれの吹雪で一面銀世界になって、砂をまいた所は太陽の熱を吸収し雪解けが促され、黒い土が浮き上がった文字は、一足早い春の訪れを伝え、心までなごませてくれた。

4. おわりに

ある日生徒が右のような詩を書いた。分校の生徒は人数は少ないということは学習を進めていく上で余り意識していないようだ。ただ運動の特性にふれた喜びをからだ全体で表現する。だから学習場面の設定によってその喜び楽しみがより大きくなることはたしかだ。

教師は、この喜び楽しみを大きくするために学習環境、生徒の実態に応じた授業の創意工夫が必要になるのであろう。ことさらに、人数が極端に少なくしかも正規のゲームなどできない分校の生徒には大事なことでもある。

生涯スポーツをめざす新しい学校体育を求める千葉大会のご案内

平成元年度第28回全国学校体育研究大会千葉県実行委員会会長 千葉県立君津高等学校校長 鈴木 純也



新しい時代の幕開けと云われる平成元年、第28回全国学校体育研究大会千葉大会が開催される運びとなりました。時あたかも、新学習指導要領が告示され、各地で講習会が開催されている現在、まことに時宜を得たものと、充実した大会となることを心より念願しております。

昨年6月、日本学校体育研究連合会長宛、大会開催受託の文書を発送以来1年4ヶ月、千葉県学校体育研究連合会の組織を総動員し、多くの人達が公務

の傍ら精力的に東奔西走してそれぞれの分野において滅私の準備に取り組みました。加えて、千葉県教育委員会、関係各市の教育委員会の心暖まご理解とご協力を得、日本学校体育研究連合会の会長をはじめとする役員並びに事務局の皆様のご懇篤なご指導ご激励を戴きながら今日に至りました。改めて心より御礼申し上げます。全国各地よりご参集の皆様方に、なるべく多くの貴重なお土産をお持ち帰りいただけるよう、さらに、最後の仕上げに鋭意努力中

であります。短時日の準備で至らぬ点もあろうかと存じますが、真摯な努力をご理解いただき、ひとりでも多くのご参加をお願い申し上げる次第であります。

趣 旨

次代を担う幼児・児童・生徒1人ひとりの個性を生かした学校体育の在り方について、授業公開・研究発表・研究協議等を行い、今後の学校体育の充実に資する。

研究主題

自ら運動に親しみ、豊かな心と健やかな体を育て、生涯スポーツをめざす新しい学校体育を求めて

期 日

平成元年11月9日(木)・10日(金)

会 場

第1日 全体会 千葉県文化会館 千葉市

第2日 分科会

幼稚園 津田沼市1会場

千葉市2・市原市1・船橋市1

小学校 習志野市1・八千代市1

浦安市1会場

中学校 千葉市2・市川市1会場

高等学校 千葉市2会場

特殊諸学校 君津市1会場

※ 詳細については下記にお問い合わせください。

〒276 千葉県八千代市勝田台南1-1-1

県立八千代高等学校内

千葉県実行委員会事務局 ☎ 0474-86-3385

※第1日 全体会では「新学習指導要領と体育指導」

について、文部省担当官の解説を予定しています。

大変有益な解説をいただけるものと思いますのでどうぞご期待ください。また、「生涯スポーツと学校体育」の演題にて、昭和女子大学外山滋比古教授の講演も予定されています。将来を展望した学校体育の在り方について示唆に富む講演を期待しております。尚、アトラクションとして「なのはな体操」・「太極拳」・「佐原ばやし」を用意してあります。ご観賞ください。

※第2日 14分科会場に分かれ公開授業・研究発表・研究協議が予定されていますが、活発なご意見を頂戴して大会を盛り上げていただきたいと願っています。また、指導助言とともに新学習指導要領の分野に踏み込んだ講評もいただけるものと、大いに期待されます。

※ **ご案内**

1. 都道府県代表者会議

11月8日(水) 14時 千葉県文化会館

2. 国理事評議員会

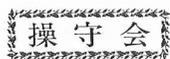
11月9日(木) 15時45分 千葉県文化会館

千葉県は、第1回大会を開催した名誉ある県であります。当時と比較しますと新東京国際空港・第1回生涯学習フィスティブアルの開催される幕張メッセの完成・東京湾横断道路の着工等躍進著しい県であり、また、三方海に囲まれ自然の豊かな県でもあります。現在、千葉県を訪れた人々に、心温く思いやりのあるサービスをしようと“さわやかハート千葉”県民運動を展開中であります。大会終了後、千葉県の風土と県民の心に接していただければ大変有難く存じます。全国津々浦々から沢山のご参加を心よりお待ちしております。千葉大会のご案内とさせていただきます。

祝

第28回全国学校体育研究大会

千葉大会



つくば国際スポーツセンター

〒305 つくば市大角豆1744 TEL 0298-55-0333